

## ヘレン・ケラーがやって来た ～1937年 新潟編～

91K019 長谷川 晶子

### 始めに

「ヘレン・ケラー」を卒論に取り上げたのは、以前から福祉に興味を持っていた為である。欧米文化論演習のゼミに所属している事で福祉世界を変えたような世界的人物を探していた。そしてヘレン・ケラーを思い付いたのである。

早速、自伝や伝記を読んでみると、戦争前後三回にわたって日本へ来た事、そして偶然に一回目の来日には地方講演に出掛け、その中に新潟が含まれていた事実を知った。歴史上の人物が私の住んでいる町に来て、演説をした事に何か親しみを感じて新潟にやって来た女史の足跡を中心に論文しようと決めたのである。

しかし1937年という事で資料がない上に探す当てもなく悩んだ。その時、担当教授から「自分の足で探せ」という助言を頂いたのである。私はその言葉を心に刻み、新潟県立図書館で『新潟新聞』や『東京日日新聞』のマイクロフィルムから当時の記事を探したり、ヘレンを呼んだ新潟県立盲学校、現在の視覚障害者の事情を知るために新潟県盲人協会へ足を運んだ。その結果、当時盲学校の生徒であった人や、現在県盲協の会員である人と知り会うことが出来、貴重な論文材料を集められたのである。

自分の足で得た資料を論文の中に組み込み、簡単な生い立ち（運動家と呼ばれるまで）、日本への道程、新潟での講演、現在の視覚障害者の四つに分けて女史の盲人向上の為の人生と新潟での動きをまとめることにする。

誕生から1年6ヶ月にして三重苦を背負うことになったヘレン・ケラー。自分の生涯は「美しい愛情と友情によって飾られている」と言っている。アン・サリバンを始め多くの人物が彼女の自伝に名を連ねており、その人達によって助けられたのである。よってヘレンは重い障害を持っていても「本当に幸せです」と言い切れるのである。

次第に貧しい人や、障害を持った人が社会に取り残されている実態を知り、ヘレン・ケラーは立ち上がった。

尚、現在禁止用語となっている言葉やフィルムから読み取れなかった文字（※で示す）が論



文中に幾つか出てくる。これらは自伝からヘレン・ケラーの言葉、当時の新聞記事を多く引用した（「」で示す）為である。

## § 1 生い立ち

### ①誕生と病気

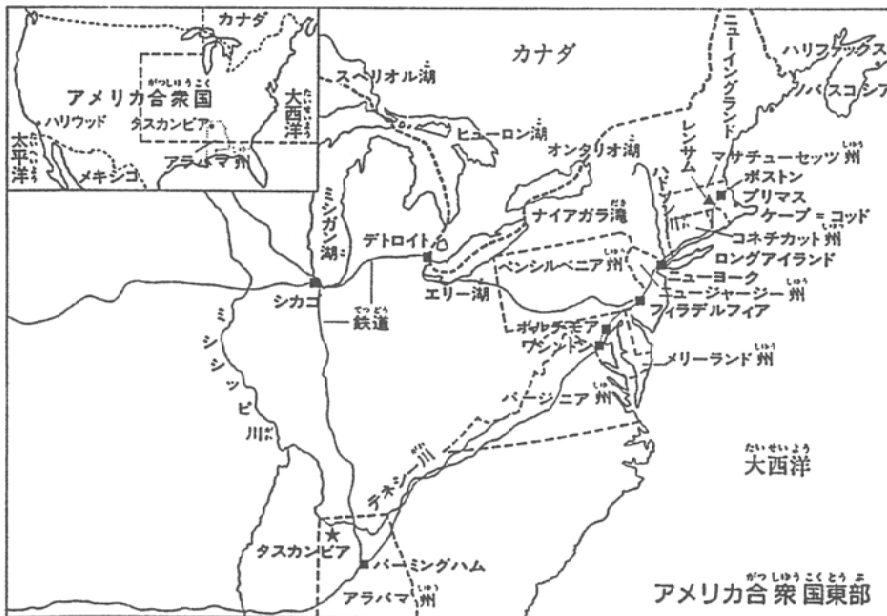
ヘレン・ケラーは、1880年（明治13年）6月27日アラバマ州タスカンビアで父アーサー（南方連盟軍大尉）と母ケート（後妻でかなり年下）の初子として誕生した。彼女には二人の腹違いの兄ジェームス、シンプソンと5歳違いの妹 Mildred がいる。《図1参照 アメリカ合衆国東部図》

父親は娘に先祖で尊敬していた Mildred Campbell と名付けたがっていたが、ちょっとした手違いでヘレン・アダムス・ケラーと命名されたのである。この名前はスイス系統の影響を受けているようだ。それは父方の祖母であった人がヘレン・アダムスといひスイス人であったと言う事実から推測できる。

生まれて6カ月目に片言で「HOW DAY」の言葉を発し、1歳の誕生日に初めて歩いた愛嬌のある赤ん坊であったが、そのような幸せは長くは続かなかった。「陰鬱な2月には恐ろしい病気がやって来て、二つの目と二つの耳を永久に閉ざし、私を生まれたばかりの赤ん坊同然の無意識な状態に突き落としてしまったのです」

母親23歳、ヘレンは1歳6カ月の時に高熱を出し、その病名は胃と脳髄の急性充血と診断された。

《図1》



現在では、ある種のバクテリアかウイルスが起す脳炎にかかったのであろうという見方がなされている。病気後は誰も本気で彼女の意思に逆らう者はなく、ヘレンは自分の好きなように物事をする神聖な権利の持ち主となっていた。

又、先祖の一人がチューリッヒ初の聾啞教育者であった事に関して自分の障害と浅からぬ因縁があるのではとヘレンは言っている。

## ②アン・サリバンとの関わり

### 〈教育〉

1887年3月3日6時半にアン・マンスフィールド・サリバンがパーキンス盲学校アナグノス校長の推薦により約半年間の準備期間を経て、20歳の教師としてマサチューセッツ州からやって来た。到着したこの日より幽霊と見なされていた6歳のヘレンの手に文字を綴る教育が開始された。

ヘレン・ケラーで有名なシーンは、湯飲みと水の区別が出来ずにいたのが、ポンプからわき出る水に触れることで物には全て名前がある事を知った場面であろう。自伝にはこの段階に至るまでをいかにも直ぐにマスターしたかのような描写をしているが、アン在教育記録や映画『奇跡の人』を見ると、服従と愛を学ばせる為にアンは努力と根性のすさまじさが浮き彫りとなる。思い通りにならないと癩癩を起し物を投げ付ける、食事は手づかみ、いたづら好きであったヘレンは自分を自由にさせないアンに暫く懐かなかったのである。

しかし「私は子供にこれ程の力と忍耐があろうと思ってもいなかった。けれども私たち二人にとって幸いなことに、私の方がいくらか強く粘り強かった」のである。やがてアンは努力が実り、閉ざされた心は開かれていく。彼女はヘレンを、始めは野生動物や小さな野獣人と記録に残しているが、教育が進歩するにつれて私の生徒・優しい子供と言葉を変化させている。

彼女の生徒は急激に単語の意味を知り、文章作成が可能になり点字をも習得するようになる。失っていた笑顔を表情豊かにさせ、才能を生かすように教育が進められた。月日が過ぎると、指文字を通して語彙を増し自由に意思を表すようになる。

アンは教育方針には音声教育は計画させていなかった。それはヘレンが乗り越えられない障害だと判断を下していたからである。しかし、ヘレンが自分の意思伝達が他人とは違うことに気付かだしてから発声法を学びたいという衝動は強くなった為に、ホレスマン盲学校・サラ・フラーに1890年より学ぶことになった。

「IT IS WARM」が病気後始めて口にした文章である。その時の自分の気持ちを驚きと喜びで一杯であったとし、家族は「私の口から出る一綴り一綴りに頷きつつ、喜びの余りに言葉もなくてただひしと私を抱きしめてくださったお母様の様子、妹のミルドレッドが私のもう一方の手をつかんで接吻しながら躍り上がった様子、お父様はお父様で男らしい沈黙のうちに、誇りと愛情を示しておられた様子」であったとヘレンは感じ、こうした光景を思い浮かべるとき、両眼に熱い涙が今も溢れると残している。

アンは教育主旨は、健全な者と同様に生活をさせることで、乗馬・ソリ・水泳とあらゆる事にチャレンジさせた。決して神童として世間に騒がれたいと考えていたのだ。

ここでアンがなぜ献身的に自分の身を一生他人のヘレンに捧げたかを述べておきたい。博愛主義者という立場からでなく、生活費を得るためやってきたと本人は言う。実際そうであったかも知れない。しかし幼い頃に家族を失った上に視力もかなり悪く、身寄りもなく救貧院で哀

れな生活を送っていたアンは誰か自分を頼りにしてほしい、独りは嫌だといった気持ちも強かったのではないだろうか。ヘレンは自分の心の目を開かせて愛する為、家族はサンタのクリスマスプレゼントとアンを表現するが、彼女にとってもヘレンは幸福な星の下に生まれたと自分を言い切る存在になっていくのである。

#### 〈大学生活〉

ヘレンは大学へ行きたいという希望が強く、ケンブリッジ女学校（中途退学）を経てラドクリフ大学へ入学することになった。専攻は英文学である。多くの困難の後にやっと掴んだ合格である。障害は別として同じ課目に興味を持ち同じ様に社会に乗り出そうとしている女学生と共に学位を競い、一生懸命に勉強する気構えを持っていた。

授業はアンと共に参加し全ての内容を彼女に指話してもらい、点字にない本を何度も読んでもらう方法をとっていた。しかし大学は実際想像していたロマンティックな存在とは掛け離れていた。点字で書かれた書物の不足、時間不足、教師らと親しくすることも少ない、クラスの人との交流もあまりないといった有様であったからだ。アンの手だけを信頼して過ごしていたのである。二人は毎日夜遅くまで勉強をしていた。

盲人にとって一番苦しい事は、生活の些細な行動でも他人の世話にならなければならないことであるので、自分一人の力で点字を読み、論文の材料を集めたり試験の準備をしている時、喜びを感じると言っていた。そして自分しか出来ないことを見付ける為に、受けている教育を将来どのように生かすかをしばしば考えていた。

得意な科目は哲学。ソクラテス、プラトン、デカルト、ミルトンを学ぼううちに、触覚と嗅覚から起こる印象を以前よりも一層吟味するようになったり、盲目の自分自身を精神の力でコントロール出来るよう成長していった。そして科学の試験を受けることを何よりも苦しく感じていた。数学も幼い頃からどうしても納得出来ない分野であり、「私には数学の頭がなかった」と残している。

弱い視力で自分のために共に学問に励んでくれたアンに感謝し、優秀な成績で卒業を迎える。卒業式は多くの人が集まり、誰もがヘレンを祝福しアンをたたえたと報道されたが、実際ヘレン自身が体で感じるには、来賓も少なく例年に変わらないものでアンの話には一言も触れることもなく、祝賀会后、静かに二人は退いた。

学課で苦しまなかったら楽しいカレッジライフを味わえたかもしれない、四年間の生活で学んだことは忍耐と言う学問であった、と大学時代を振り返っている。《写真1参照 大学卒業時》

#### 〈恋愛〉

アンの恋愛はヘレンの卒業後である。一人の女性としてジョン・メイシーに見初められ結婚。



《写真1》

三人で楽しい生活を送るようになった。しかし結婚は崩壊を迎える。メイシーはアンとの結婚を決めた時、人間とではなく、ある学校と結婚したのだ、と言う事に気付くべきであった事や、アンが自分よりヘレンを一番の存在に置き、妻になろうとしないと不平を言った。不機嫌で常に疲れており、何をするか予想もつかない彼女に愛想を尽かしたのである。ヘレンは先生の不機嫌は自分の為に尽くしている事からくるストレスであるとメイシーに訴えるが、彼は再び姿を現さなかった。

一方、ヘレンは以前から自分の結婚に関しては背を向けていた。自分と結婚する事は彫刻と結婚するようなもので、相手に負担をかけるだけで何もしてあげれないと人にもらしていた。

しかし、一度恋愛経験をしている。ヘレン36歳の時で、予期せぬ恋人はピーター・フェイガン29歳、彼女の秘書であった人物である。物静かで、有能、控え目な信頼できるフェイガンに以前からヘレンは心引かれおり、彼もヘレンの為に点字だけでなく、指話もマスターしていた。

プロポーズの様子やその時の自分の気持ちを、「長い間私の手を黙って握っておられた後、静かに話し出されるのを聞くと、その青年がかほどまでに私の事を思ってくださったのか、という事を知って、私はびっくりしました。その愛の言葉を聞いているうちに私の心も和み、私は全身を震わせながら聞いていました。その青年は、もし私が結婚してくれさえすれば、いつまでも側を離れないで人生の苦しみを共にして助けたいと言うのであります。本も読むし、私の為に書き物の材料も集めるし、先生がしておられたこと何でもすると言うのであります。彼の愛は私の無力と孤独の上に照りついた太陽でありました。愛される事の喜びは私を有頂天にさせ、私は男性の生活の一部になりたいと強い欲求を感じておりました」と語っている。驚きと喜びとが混同している様子が伺える。

二人は婚約を交わし（婚姻届けも出されていた？）駆け落ちの計画も密に行われていたが、内緒の行為がやがて見つかり、案の定二人は引き離され、ヘレンは厳重な監督の下で保護される。母やアンと自分の幸福が分かち合えないことを悟り、ほとぼりもさめていった。そんな状態の中でも二人は文通をするが、ついに恋の夢に終りを告げる。

家族がなぜヘレンの結婚に反対をしたかの真実は明らかではないが、彼女を取巻く周囲の事情が許さなかったことは確かである。

恋愛事件後、ヘレンは一家を守るのは自分であると考え、アンのために生きることを決心する。

後に彼との恋愛を不幸な星の下に咲いた花や暗い海に取り囲まれた歓喜の小島、心を乱れさせ前後のわきまもなくさせたものであった、短いものであったが強く愛せられる経験を持っただけで嬉しいと振り返っている。

二人の恋愛はいずれも思い通りに実らなかったが、誰も見えない、そして入り込めないようなより強い信頼と愛情でヘレンとアンは結ばれていく。

### ③生活の糧を得るために

「私達はしょっちゅう貧乏をしていた」の言葉通り生活費を作り出すことは生涯を通じて最大の課題であった。障害を持っていることで職業選択は不可能であったが、自分の力で働いてお金を稼がなくてはならなかったのである。また、盲人の為に幸福な世界を造り上げたいと懇願していた。

〈作家として〉

“レディース・ホーム・ジャーナル”誌に五回にわたって今までの人生を書いたのは、大学

在学中であった。学費が寄付によって支払われていた事や原稿料3,000ドルの報酬の高さにひかれ、引き受けたという。メーシー氏（大学教授）の協力もあって無事に書き上げるが、資料収集や自分の考えをまとめることに大変な苦勞をしていた。

印税と年金が生活費であった。

〈講演旅行〉

ヘレンには話すことは「世界で国語を持たぬ人間がいないと同じ様に、言語なくしては完全な人間とは言ふ事が出来ない。だからその言語がよし美しくないとしても、とにかく言葉を発することの内には尽きぬ喜びがあるものです」という反面、僅かな収入の道を探すための手段でもあった。

教養ある専門家や慈善家を対象とし、アンの教育方法や障害児の教育改善を講演をする事を思い付いたのである。初めての講演は「心と手—感覚の正しい使い方」であった。トムソンを秘書として雇い、大陸横断の講演旅行を始めた。

やがて、戦争によってヘレンは社会主義思想へ傾倒し、講演内容も盲人問題に限らずに社会問題（戦争中止や平和を訴える）を言及し始めると、収入は次第に減っていった。人々は、ヘレンを人形として見ていたので、彼女が自分の意思を話すとは考えもしなかったのである。

〈女優として〉

次に映画を通じてヘレンの半生を描くと共に障害者の社会不正を救うために『救済』という

映画に出演した。映画に出る事で、お金の心配が少し減る上に、より多くの人に盲人問題を語れると考えたのである。

「もしも私が先生より先に死ぬようなことでもあれば、先生はたちまち生活に困らなければなりません。当時の収入で私はどうにか生活して行くことが出来ましたけど、それ以上に貯金することはどうしても出来ませんでした。もっと収入を増やすことを考えなければならぬ。友人が仕送りしてくれていたお金は私が死ぬと同時に途絶えてしまうことになっていた」という状態であったのだ。

作品は成功した。しかし世間に品位がない、金の為ならなんでもすると非難される事もあったらしい。

この利益で盲人の為にお金の心配をせずに打ち込めると思っていたが、決して経済的には成功と言えなかった。

《写真2参照 映画のポスター》

〈寄席芸人〉

オーヒューム一座に加わって、巡回公演をしていた時もあった。

この仕事は講演以上に収入を得られるだけでなく、楽であったと言う。握手を求められることもなく（彼女にとって手は、言葉を伝える手段の一つであったので、握手をしすぎると手の感覚がおかしくなる）、客も遠慮せずに笑ってくれるからである。しかしアンは障害を世間にさらすことを忌み嫌っていた。

当時の盲人は救貧院に送られたり、見世物としてショーに出たりしていた。一人では生計を立てられず、人間の屑として扱われていたのである。盲人は絶望的であったのである。ヘレンはそのショーを逆に利用して、障害者を笑い者にするのではなく、真剣に次のように訴えた。



《写真2》

「私が皆さんに言わなければならない事、それはとても簡単なことです。(中略)私は、ずっと話が出来ませんでした。しかし、今ではこうやって話しています。それは、多くの方々の優しいお心とお力添えのお陰なのです。そういう方達の愛を通して、私は、自分の魂を、神と幸せを発見致しました。その事がどんなに意味深い事かお分りになりますでしょうか。私達は、お互いによって、そしてお互いのために生きています。ともすれば、どんなにたくさんの事が出来るでしょうか。私達と私達の幸福の前に立ち塞がっている掟は“汝らお互いに愛せよ”です。私は声を高くして、愛と、喜びと、約束されたこれからの人生を神に感謝致します」

生活と盲人向上の為に旅回り芸人として四年間ショーに立ったのである。

やがて原稿の依頼、講演やショーの中止が相次ぎ、生活の見通しがたなくなってしまう。人々は“生きた奇跡”に飽き始め出したのである。

家賃は慈善者からの年金と支援者からの援助で賄われていた。

《写真3参照 ショーに出ていた頃 左からヘレン、アン、トムソンの順》



《写真3》

〈アメリカ盲人協会の一員〉

1921年、盲人の為に全国的機関であるアメリカ盲人援護協会（AFB）が成立した。ヘレンは闇の中で苦しむ多くの人に、人間として生きる機会を与える為に協力を求められ、旅興行で盲人問題を話して人々の関心を高める事から、今度はその関心を盲人を助ける為の仕事へ変わったのである。

アメリカ全土に講演行脚し、募金を集めるために奔走する日々の中で、盲に対する偏見をなくし、盲人の施設がどの州においても改善されるように政府に働きかけた。デトロイトのヘンリー・フォード氏（自動車王）の援助によって、工場で盲人が敏感な手を使って精密作業で成果を上げることにもなったり、ジョン・D・ロックフェラー二世（石油王）から最高額の寄付を受けたのもヘレンの頑張りに寄るものである。

協会側はヘレンを“国の財産”として生活を保障、金銭的に安定した生活をやっと送ることが出来るようになったのである。

ヘレンの働きによって、障害者への関心は増大し、国からも障害者に援助金が出ることになり、盲人は生活が出来るようになったのである。

1936年にアン・サリバンの死を境に、ヘレンは心を固めたのである。「先生は、自分のような者の為に、その一生を捧げて死んでいかれた。それこそ完全な奉仕の生涯である。残された私こそ、その連続でなければならない」

そして世界各地へ、日本へと運動を広めて行く。

## § 2 日本上陸

### ①浅間丸入港

1937年（昭和12年）4月15日（木）午後12時30分、横浜港に郵船浅間丸が入港した。ヘレン・

ケラーの他にこの船にはデンマークの現代物理学者ニールス・ボア氏、米国国際オリンピック委員ウィリアム・ガーランドら714名が乗っていた。

午後1時に第四号岸壁に船が繫留させると、人々はそれぞれの迎えの人を探し始めた。ヘレンはと言うと、岩橋武夫夫妻、政府高官、盲聾学校代表、グルー米国大使、朝日新聞、招致委員会を始めとする人々から歓迎を受けた。彼らは日米両国旗を飾った自動車三台を連ねて東京の宿舎帝国ホテルへ向かった。埠頭や沿道には数千人の人々が両国旗を振り来日を歓迎した。

四日月にわたる日本での講演のスタートが切られた。

## ②日本の友 岩橋武夫

この来朝に大きく影響したのは岩橋武夫氏で、ヘレンが日本で最も信頼を置いている人物である。彼はヘレンの通訳として各地の講演場所へ共に行動することになっている、二人の繋りを見る必要を見てもみる。

岩橋武夫は「愛盲の使徒」と称えられ、今日の盲人福祉は彼なしでは考えられないとまで言われている人物である。

早稲田大学理工科在学中に網膜剝離にかかって失明。27歳の時に英国へ留学。そこで彼は障害者に対して盲人立法を立て自立と必要な介護をうたい国家の責務として対処している政府の姿を見た。まさに「闇の中に繋がれた哀しい人々の解放」であった。帰国後は関西学院（英文学と哲学）と大阪市立盲学校で教鞭を取る傍らで日本の福祉を確立する為に盲人立法とその適用、成立理念について発表するが、人々の関心を引くまでに至らなかった。

しかし1929年、彼に一つの転機が訪れる。それは中央盲人福祉協会主催で来日したルファス・G・マザーとの出会いである。英国留学経験の実績と盲人福祉事業の推進を志していたことで岩橋氏は彼女の通訳としてバッテキされたのである。マザーは「盲人の幸福を願い、盲人の為に働き、盲人の幸福を喜ぶ」をモットーにして世界にライトハウス運動を展開し、ヘレンを副会長にそして自分は会長となって指揮を取っていた人物である。そのマザーが日本でライトハウス運動を進めにやって来た。中央社会事業協会や東京盲学校で講演をし、彼に計り知れない影響を与えた。

1934年、彼はキリスト教各派の大学から招かれて米国へ渡った。この旅行中には、ライトハウス建設の着工を知らせる為に再度マザーに会う事とヘレン・ケラーに会う事が予定に組み込まれていた。

女史との初対面は12月18日に達成された。ヘレンは彼を『LIGHT OF DARKNESS』から、日本の歴史や風情はラフカディオ・ハーンから学んでいた。日本人を「礼儀正しいので、障害の部位はなるだけ見ないようにする」国民であると感じていたようだ。生憎この日はアンが重体で回復の見込みのないまま病院から退院したばかりという状態の中で、二人は出会った。ヘレンは岩橋氏を流暢な英語とユーモアを交えた詩的な情熱に満ちた人物と評価している。

彼は日本には組織化した団体や社会福祉施設がない実態を話し、「是非日本へ来て、日本の悩める盲人達を激励し、また盲人に対する社会の関心を高めてほしい」と心から頼んだ。アンは「私はもういつ天国に召されるか分かりません。その事は少しも心配いらぬ。はるばる日本から盲人啓発の為に助けを欲しいとの依頼だから喜んで行ってあげて下さい。あなたをここまで教育したのも、そのような求めに応じて盲人と手を握り、皆が幸せになるようにと願っての為でした。私が健康なら三人で行って、武夫さんを助けてあげられたのに」と返答に迷って



いたヘレンを励ましたのである。二人は友情を結び、来日を約束したのである。

予定は1935年10月13日。しかし恩師の病気悪化のために来日せず。

1936年4月16日、世界13番目のライトハウスが落成する。その間にアンは冠状動脈血栓の為、70歳生涯を閉じた。

岩橋氏はヘレンに慰めの言葉と共に今一度日本への来訪を促す手紙を送った。AFBはヘレンを「国内・国際関係カウンセラー」として盲人福祉の為に国内外を自由に行動させることを決めた。日本は外務、内務、文部の三省がスポンサーとなってヘレンを政府の来客として迎えることにしたのである。

1937年4月13日の彼女の日記には「日本のある西の空に向かっていて、先生が私の横にいて、勇気づけて下さるのを感じたように思えた」と書かれてある。

### ③東京でのスケジュール

二人の関係が分ったところで、東京滞在でのヘレンの行動を追って見る。

15日午後5時ホテル二階のバーにて記者会見は行われた。

ヘレンの話し方については§3で触れることにする。

「日本への今回の旅行は私にとって感激的な喜びであります。それは私の幼年時代からの夢即ち桜咲く日本を訪ね神社、佛閣に詣でて古美術に触れることを意味します。私に与えられた旅程において日本の最も興味ある場所が含まれている事はこの上もない喜びであります。しかし更に大きな喜びは日本の盲人その他身体不自由な方々に激励の言葉を伝える機会を与えられたことである。私はこれら身体不自由な方々がなにを為し得るかと言う事を知った時には力から力へと進み遂に東洋における一切の悩みあるものを生かし固い信仰と決意をもって勇気と仕事をその極度にまで※せし得ることを信じて疑いません。憧れの日本に第一歩を因した私はかほどの歓迎陣が待っていようとは想像していませんでした。人も花も鳥も何もかも私を満足せしめないものはありません。厚く歓迎の御厚意に答えて到着のご挨拶といたします。おお美しいニッポンよ、私はただ心の底から御礼申し上げます。この厚い歓迎こそ私が永久に忘れることの出来ない驚くべき力を与えたものです。私がこれから美しい国の盲人その他の不具者の為にする仕事が彼等自らを助け自らを完成し得る一助となることを心をこめて願っています。アリガトウ」

黒い服に真珠の首飾りでこの会見に臨み、一番初めに日本を臭いで感じたと言った。

16日から東京滞在最終日までの行動は『東京日日新聞』を参考にする。

16日（金）

- |          |  |
|----------|--|
| AM 9時30分 | ・地味な黒いドレスを着て、米国大使官邸を訪問。                          |
| 10時30分   | ・高輪の高松官邸を訪問。象牙製の美術品を拝受、記帳。                       |
| PM13時30分 | ・新宿御苑の観桜御会に参列し天皇、皇后両陛下と握手。                       |
| 18時      | ・黒地に菊の花模様のイブニングドレスで華族会館にて大久保公爵主催で中央盲人福祉協会晩餐会に出席。 |

17日（土）

- |          |                  |
|----------|------------------|
| AM 9時45分 | ・宮内省の松平宮相を訪問、記帳。 |
| 10時      | ・内務省の河原田内相を訪問。   |
|          | ・外務省の佐藤外相を訪問。    |

- 10時40分 ・林総理大臣を訪問、首相官邸で会見し「心眼明朗」と書かれた額を拝受。
  - PM14時 ・日比谷公会堂での市民歓迎会に臨み、一時間の講演、第一声をあげた。
  - 18日（日）
  - AM11時 ・目白の徳川義親侯邸の聾協会振興会主催の歓迎会に臨む。
  - PM17時 ・白いイブニングドレスで東京会館で徳川家達公を委員長とするヘレン・ケラー女史歓迎晩餐会に出席、この模様はNHKラジオを通じて全国へ流される。
  - 20時 ・東京駅発大阪行きの汽車に乗る（19日の朝到着）
- 東京は公的機関が中心であったが、大阪から市民を中心に全部で38都市、97回の講演を消化していく。新潟は23番目の都市にあたる。《資料1参照》

### § 3 新潟へやって来たヘレン・ケラー

来日から約二カ月たった6月11日、ヘレンは新潟にも障害者の地位向上を求めてやって来た。当時の県内盲人状況と講演の様子を主に『新潟新聞』を参考としてまとめてみる。

#### ①県内の盲人状況

三重苦を克服したヘレン・ケラーを新潟に迎えるにあたって、県立新潟盲学校長の樋口嘉雄氏が『新潟新聞』1937年6月10日～13日に連載した「新潟へ来る聖女 ヘレン・ケラー女史と愛盲運動」の記事は、当時新潟に暮らしていた盲人の姿を色々な面から調査している。樋口氏の考え方にも注目しながらこれらを基に表やグラフを作成し当時を振り返ってみる。

盲人を解放する為の愛盲運動には、多くの問題があった。大別すれば失明防止問題、教育問題、職業問題、保護問題の四つであった。

#### 〈盲人数〉

1936年10月の調査で本県の人口は2,087,000人であった。その約0.13%に当たる2703人（男1220、女1483）として数えられ生活をしていた。

年齢別に分類すると《表1》となり、51～71才以上の層に集中していることは一目瞭然である。逆算すると1860年代（明治初期）から1880年代（明治20年代）に生まれた人となる。

#### 〈教育〉

盲児の就学率は、健全な児童と比べるとかなり低かった。その理由として、盲児の家庭の多くは貧困であった為に盲学校への入学が難しかった事や、十分な学校制度が確立していなかった事が挙げられている。

ちなみに本県の盲教育は1878年（明治11年）に天皇が北越御巡幸の際、眼病の原因究明や診

	男	女	合計
学 齡 前	14	7	21
学 齡 児 童	79	41	120
15～20	51	33	84
21～30	111	118	229
31～40	136	141	277
41～50	182	194	376
51～60	278	303	581
61～70	236	318	554
71～	133	328	461
合 計	1220	1483	2703

《表1 1936年の県内視覚障害者状況》

《資料1》

ヘレン・ケラー巡回講演日程表（『日本ライトハウス四十年史』より作成）

都市名	日時（昭和十二年）	聴衆概数	訪問先
東京	四月十五日～十八日	一八、〇〇〇	新宿御苑、高松宮廷、宮内省、外務省、内務省、文部省、米國大使館
大阪	四月十九日～二十四日	三二、〇〇〇	府庁、市役所、商工会議所、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社、ライトハウス
東京	四月二十五日～三十日		徳川義親侯邸、三省堂、主婦之友社、温故学会、官立東京盲学校、同聾啞学校
横須賀	五月二日	一、五〇〇	馬淵聾啞学校
鎌倉	五月二日	一、五〇〇	
静岡	五月四日～五日	五、〇〇〇	静岡県立静岡盲学校、同聾啞学校
名古屋	五月五日～六日	六、〇〇〇	愛知県立名古屋盲学校、同聾啞学校
彦根	五月七日	一、五〇〇	滋賀県立盲学校
大津	五月七日	一、〇〇〇	
京都	五月八日～十日	九、〇〇〇	京都府立盲学校、同聾啞学校
奈良	五月十日～十三日	七、〇〇〇	奈良県立盲啞学校
神戸	五月十四日～二十日	七、〇〇〇	兵庫県立盲学校、同聾啞学校
岡山	五月二十一日～二十二日	五、〇〇〇	岡山県立盲啞学校
広島	五月二十二日～二十四日	六、〇〇〇	広島県立盲学校、同聾啞学校
下関	五月二十四日～二十六日	二、五〇〇	山口県立盲啞学校
福岡	五月二十六日～二十八日	七、〇〇〇	福岡県立福岡盲学校、同聾啞学校
長崎	五月二十八日～二十九日	四、五〇〇	長崎県立盲啞学校
熊本	五月三十一日～六月一日	五、〇〇〇	熊本県立盲啞学校、回春癲病院
大分	六月二日～五日	二、〇〇〇	大分県立盲啞学校
岐阜	六月八日～九日	二、五〇〇	岐阜県立盲学校、同聾啞学校
金沢	六月九日～十日	二、〇〇〇	石川県立盲啞学校
長岡	六月十日～十一日	二、〇〇〇	新潟県立長岡盲啞学校
新潟	六月十一日～十二日	三、〇〇〇	新潟県立新潟盲啞学校
秋田	六月十二日～十六日	四、〇〇〇	秋田県立盲啞学校
弘前	六月十六日～十七日	一、五〇〇	青森県立弘前盲学校
青森	六月十七日～十八日	五、〇〇〇	青森県立青森盲啞学校
函館	六月十八日～二十二日	四、五〇〇	北海道函館盲啞院
小樽	六月二十二日～二十三日	二、〇〇〇	小樽盲啞学校
札幌	六月二十三日～二十五日	五、五〇〇	札幌盲学校、同聾啞学校
盛岡	六月二十八日～三十日	四、五〇〇	岩手県立盲啞学校
仙台	六月三十日～七月二日	七、五〇〇	宮城県立盲啞学校
福島	七月二日～三日	三、〇〇〇	福島県立盲啞学校
水戸	七月三日～四日	二、五〇〇	茨城県立盲啞学校
朝大邸	七月十二日	二、〇〇〇	癲病院
京城	七月十二日～十五日	七、〇〇〇	朝鮮總督府、済生会盲啞院
平壤	七月十五日～十七日	三、〇〇〇	平壤盲啞学校
満州安東	七月十七日～十八日	一、五〇〇	
奉天	七月十八日～二十一日	五、〇〇〇	重明盲学校
大連	七月二十一日～二十六日	九、〇〇〇	大連盲啞学校

療の為にとお金を置いていかれた事で高田に盲生を対象に学術や鍼灸を教える学校が出来たことが始まりである。

ヘレンが訪問することになっていた市内の盲学校は、1907年（明治40年）に長谷川一詮らが学校創立を成し遂げ、1922年（大正11年）に新潟県立盲学校となったのである。

1932年（昭和7年）には110人の生徒がいた。

〈職業〉

20歳以上を対象とする職業は《表2》が示している通りに鍼灸業が大多数を占めている。盲人も多種多様な職についても良いはずであるのに琴や三弦、本県については鍼灸業に限ると言っても統計上問題はない状態であった。

しかし針・マッサージという盲人の代表たる仕事は健全者の侵入によって脅かされ始めていた。

樋口氏はその事に関し、「真に職業の自由を認むるならば堂々と普通人と競争せし無るよし※が不可能ならば孤城を守る盲人の領域を犯さざる様に保護するべきであると思う」と主張、そして鍼灸業を盲の専門の職業を定義づけてしまう事も盲を守る方法の手段だと考えていた。

〈失明原因と予防〉

失明原因は多種多様であるが、本県の場合は《グラフ1》となる。この数値は大まかなもので多少正確性に欠けている。

失明を防ぐには予防と治療が重要であるとされていた。特に予防に関しては性病や近親結婚という理由から生来弱く生まれた子供が直接・間接的に言になる事や栄養不足（食物から来る病気、体質から来る場合）、母乳で育てなければならない乳児に練粉で育てた事から失明してしまうケースが沢山あると言う事実を県民に知ってもらう事で注意を促していた。

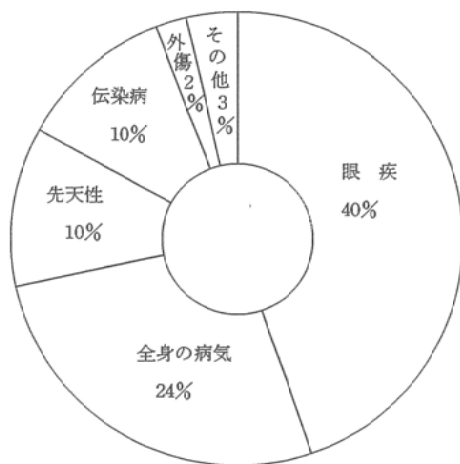
眼疾治療には、新潟県恩光会、新潟佛教協会眼科診療所、新潟県恩光会山の下トラホーム診療所等が無料診療がしていた他に中野財団新潟診療所、日本赤十字社新潟県支部病院その他三、四つの軽質診療の施設があり診療を行っていたようだ。新潟医大の熊谷眼科医は、本県の失明防止に貢献した一人として名を挙げられていた。

しかしこれらの治療所は市内に集中していたのである。恩光会が山間部や漁村へ足を運ぶが、完全とまでは至らなかった。

急務なものにもかかわらず、貧しいことや無知と言う理由で永久に光のない世界にしか生きられない人々も多く、盲人を絶無にする理想だけが掲げられていた。

	男	女	合計
無職	401	901	1302
鍼灸	554	334	888
農業	56	47	103
遊藝	12	76	88
蠶細工	12	10	22
巫女	0	17	17

《表2 職業別人口》



《グラフ1 失明原因》

## 〈保護〉

その他の問題として保護を取り上げ「文明諸外国における保護の行き届いている事は驚くばかりで殊にヘレン・ケラー女史の生国のアメリカ合衆国如きは勿論女史の非常なる努力の賜であるけれど実にうらやましいかぎりである」と言い、新潟では点字出版、点字図書館の設置、盲幼児の保護、博物館の設置、相談所の開放、生活救助、盲人と付き添い人の乗車船賃の無料、ラジオ聴衆料の無料、盲人会館の設置が識者の考慮の下で行われていた事実を明らかにしている。

盲学校校長は、長い間日本では独占を許されていた音楽・鍼按の職業も生存競争の渦の中であり、どうしたら安心して彼等が生きていけるかを考えることが人間の義務ではないかと県民に問い掛け、日本には塙保己一そして米国にはヘレン・ケラーのように記録を残している人もいる事を強調していた。

新潟市にヘレンが来ることを境に女史の奮闘を省ると共に識者の盲に対する理解と同情を切望していたのである。

## ②新潟到着

ヘレンが新潟の地を踏んだのは、6月11日（金）午後5時55分であった。県立長岡盲啞学校での講演を終えてから、信越本線新津経由で新潟へ入ったと考えられる。長岡盲啞学校では聴衆概数2,000人であったが、1945年にB29の爆撃を受けて焼失している。

一行は県教育会と県立新潟盲学校在主催する講演会に臨むためにやって来たのである。

## 〈駅〉

新潟入りした直後の様子を新聞は「希代の天才この盲聖女に接せんものと駅前から又は恰度発車時刻※の上越線上野行列車に乗り込んだ乗客は一斉に窓から顔を並べて」と記している。満員列車が到着すると三人を熊野学務部長夫妻、関屋知事夫人、松木代議士夫人、北村キイ、斎藤勝子、その他名流夫人や盲聾啞者及び小柳市長、樋口盲学校長、高橋聾口話学校長らが出迎えた。関屋知事の息女きみ子さんとみち子さんが花輪を捧げると女史は秘書のトムソンに左腕を抱えられたままでそれを受取り両嬢に感謝のキスを贈った。

一体、女史はどんな姿をしていたのであろうか。11日は黒地に白模様のドレスを着ていたと残されている。東京講演の際にも同じ事が言えるのであるが、女史が着ていた服は上等な物であると推測できる。というのは、障害を持っていても他の人々と同じ様に人生のあらゆる面で最良な物を受ける権利があり、二流の物ではいけないと言う考えの持ち主であったからだ。又アンは女史の幼い姿を教育記録の中で「青白く貧弱な所は少しもない。大きくて丈夫そうで血色も良い」、「顔付きは知的で、口は大きく美しい」、「青い目で薄茶色の髪」と残している。

このような姿でフラッシュを浴びながら一行は駅長室へ直行。前記の人々と握手を交わして会見に臨んだ。新潟入りした理由には下記に示すコメントが残されている。

「新潟へ参りました私は大きな喜びを感じます。これまで参ります途中の山や※、平原その美しさはたとえようがありません。今度新潟へ参りましたのはハンデキャップをつけられています盲聾啞の方々に対しまして幾分将来へのお助けになる仕事を致したいと只管思っていた為です。人間の目にうつる光色などが求められぬ不幸な方々を収容し教育する学校が本県には特に発達していると伺いまして私は非常に嬉しく思います。特に開眼治療などにつきましては色々貢献されている事は意義深く又多くの命を救う事に感謝に堪えません。将来今後来るべき時

代に於ましては一人の眼があいて或いは救われたという事はそれらの人々の後に来る者に※する大きな有望な前途を約束することになります。即ち国民の保健と言う事から見ても大きな意味があるのであります」

そして「新潟について何か知っていますか」と言う質問にはお米の産地だと聞いているので一番良いお米を食べてみたい事や美人が大変多いと言う事を知っていると答えた。

新潟だから特別な言葉や表現を用いたわけではない。どの地方でもヘレンの挨拶（コメント）は始めにその地方の産業や自然に触れ、次いでその地に関する高名な人物の名を挙げ、障害者に対する一般の理解と協力を訴えると言ったパターン化されたものであったらしい。しかし考えられないような努力をしていた。岩橋氏の配慮の下で作られた訪問する土地の歴史・風土・産業の点字を読み、暗唱し、完全な発音で声にする練習が移動中の列車の中で繰り返されたのである。記憶力や連想の能力が豊かな人であったようだが、57歳の年齢には過酷な旅であったと考えられる。

約20分の会見を済ませた三人は沿道に群がる国旗を手にした人々に感謝しながら宿舎「萬代橋ホテル」（現在の礎町にあった）へと自動車を急がせた。

〈ホテル〉

日本に到着して初めての宿であった帝国ホテルは至れり尽くせりであった。ロビーには桜の花が飾られ、部屋には草花や盆栽、絹のカーテン、そして従業員が島田齋を結んで振り袖という純日本式な姿で一行を迎えたそうである。調べはつかないが、新潟でもこれに近いもてなしはあったのではないだろうか。ヘレンを迎える事の出来ない都市は、時代から置き去られたものであり、誘致出来ない指導者は無能であると言われるほどの騒ぎであったからだ。新潟市へそしてこのホテルへ宿泊が決まった以上それなりの工夫を凝らし一行を迎えに相違ない。

新潟の記事ではないが、部屋に関しては面白いエピソードが残っている。外人というので宿は洋間を用意する事が全国的に多かったのであるが、ヘレンは和室を好み、同行していた岩橋氏と部屋を交換することも度々あったらしい。日本のものが珍しくてそうしたのではなく、畳や障子や襖が細かに振動する和室を楽しんでいたのである。よく和室の片隅に座布団を数枚重ねて腰掛けて、知っている人が近付くと「おはよう、イワハン」等と正確に相手の名前を言い、先に挨拶をして多くの人を面喰らわせたことがあったという。畳は人の歩き方を正直に伝えるもので、目と耳に障害を持つヘレンにはすばらしい空間であったのだ。

現在ヘレン・ケラーが泊まった萬代橋ホテルが存在しないのは残念である。

来日から約二カ月、毎日強引なスケジュールが予定されていた上に文化の違いも数多くあり新潟へ足を運んだ時には疲れ果てていたようだ。長岡市での講演後に実際トムソンが過労から来る風邪でダウンしており、秋田でも同様な事があったと言う事実がある為にその間の講演地であった新潟ではトムソンには体調の優れない一日であったと想像することは容易である。

この事実は「ヘレンが過密なスケジュールの為に倒れた」と誤報されて早く帰国するように促す電報が多く舞い込んだ。そこで「私の身体についてとやかく心を遣うものは、本当の私を知らない者である。私が生きているのはその精神の為である。真に私を思うものは、私の使命達成を願いこそすれ、屍に等しい肉体を思うべきではない」と電報を送り返したと言う。

日本での動静はすぐにアメリカや欧州各国に流されていた。世界は帝国主義的な動きを見せる日本に関心を持っていた証拠である。1937年は、国際的緊張時期であったのだ。

### ③新潟市民を前にして

翌12日、光明を失っている人々の慰めと救いの言葉を贈る講演会は午後1時から1時間の予定で新潟市白山小学校講堂にて開催された。

#### 〈講演内容と話し方〉

会場の様子は新聞に次のように書いてある。「女史の尊き体験を聞かんとして市内各高等学校、小学校の生徒その他各団体数千、さらに遠く市外遠隔の地よりも続いて団体を作って開場へ殺到する人々で大講堂も文字通り立錐の余地のない程の素晴らしい人入り」であったが、聴衆概数3,000人の中には孫に手を引かれた盲のお年寄りや、互いに手を取り合いながら助け合う盲児の姿が見受けられ「涙ぐましい情景」もあった。

いよいよ講演開始である。

#### プログラム

- |         |                         |
|---------|-------------------------|
| I・開催の辞  | 市教育会長 小柳市長              |
| II・歓迎の辞 | 関屋県知事                   |
| III・入場  |                         |
| IV・講演   | 演題 「私の過去と現在、闇と沈黙に羽ばたく魂」 |
| V・退場    |                         |

会場の拍手に迎えられ、ヘレンはトムソンと一緒に壇上に姿を現わした。傍らに飾られていた盛花に近づき、匂いでこれを言い当てたと言う。アンは「嗅覚と味覚が身体的な情報を得るのにどの程度まで役立っているのか正確に述べることは出来ない。しかし確かにこれらの感覚を働かすことによって多くの楽しみを得ている」と記録しており、まさに観察通りの行動であったと言える。ヘレン自身も「人間は音と光との世界から遮断されても、なお自己の印象と冒険とを思い出すことによって楽しい生活を送りうるものである」と言っている。騒音や顔の神経で、足音を体で感じると言った周囲の物に対して敏感に働いているのは目や耳に障害を持つ人の姿でありヘレンだけではない。決してある感覚が欠けているからその償いとして他の感覚が非常に敏感になっているわけではなく、残りの感覚が一層重要になる為に鍛練する結果、自然に強化していくのだ。

ここでヘレンの英語がどのような経路を経て市民に伝えられたかについて説明する。日本、そして新潟入りをした会見の時に残したコメントと壇上では同じ方法で言葉の伝達がなされている。まずそれは彼女の意思を完全な形で伝える為に右からヘレン、トムソン、岩橋と並ぶことから始まっている。ヘレン独特の読唇法と指話法によって言葉を理解し、口話法で自分を伝えるのだが、それには二人の協力が必要になる。

読唇法とは、ヘレンがトムソンの喉に親指をあてその振動によってG、Kの音を、また人差し指を唇にあて口の開き方でP、Hを、そして中指を鼻腔にあてM、Nの鼻音を知るというものである。指話法とは、指文字（指で色々な形を作ってアルファベットや日本語の五十音を表すようにしたもの）をトムソンの右手とヘレンの左手を握り合い言葉を綴るというものであり、この二つの方法でトムソンの言葉を理解し、口話法によってトムソンに話した。そしてトムソンの英語を岩橋氏が美文調の日本語に通訳し、市民に伝えられたのである。第三回目来日のものであるが実際この連携を、そしてヘレンの声の入ったテープを参考資料として提出する。

各地での講演の主な内容は、視力の保存・盲人の自力更生・障害者に対する激励であったので新潟でもこの様な内容が語られたと考えられるが、実際の内容については「切り拓いた荆の道を回想示唆に溢れる講演をなし、満場から感謝の嵐を浴びた」と記されているだけである。内容の説明の記事は新潟の新聞だけでなく全国的にみても十分ではない。滞在期間中の国や人々の歓迎ぶりは述べられているが、身体障害者問題に対して言及した皆無に等しいのだ。時局がそうさせたのである。

講演後は新潟盲学校へ向かう予定であった。

〈新潟県盲学校訪問〉

午後3時に予定より1時間遅れて新潟盲学校へ到着した。全校生徒123人及び高橋助七氏経営の私立新潟聾口話学校の生徒30名、両校の卒業生、父兄、教師らが小旗を手に校門前に整列していた。そして「自動車が横づけになるや見えぬ目、叫べぬ口、聞こえぬ耳の児らは両手を差しあげて歓迎」したのである。

ヘレンらは校長室で少し体を休めた後、講堂に姿を現わして生徒達の拍手に答えて軽く一礼、盲学校の生徒筒井ミエさんや聾口話学校生徒の花束を受けて「アリガトウ」の言葉を繰り返して、キスを贈った。記念撮影（現在は残っていない）をして、「出発時間の迫る心忙しさの間も歓喜を感謝に沸く意思と感情の廻らぬ舌にのせて生徒等に訓と激励の辞を述べ“サヨナラ”とトムソン秘書の忘れ得ぬ一時を過ごした」のである。聾口話学校生徒岩野昇君の歓迎と送別の辞を聞いた後、午後3時25分同校を去った。

当時この盲学校一年生であった人は、教師から事前にヘレンの来校を知らされ、今までの彼女の経緯を聞かされていた事や女史がブーツらしき長い靴を履いており、体格の良い人であった事を記憶していると語ってくれた。ヘレンの声はあまり美しいとはいえないものであったらしい。

その後ヘレンを乗せた自動車は次なる講演地の秋田へ向かう為に新発田駅を目指し走った。予定では4時21分発の羽越線に乗ることになっていた。確かに1937年には新潟—新発田間を結ぶ白新線は開通していない（1956年開通）ので自動車で行動したことは絶対的であるが、はたして50分で新発田まで車で行くことが可能であったのかが問題である。現在の場合はバイパスを通ればよいのだが。

これは国道10号線が存在で解決が出来る。1937年4月15日、つまりヘレンらが横浜港に入港した日に偶然新潟では新潟—新発田間結ぶ道路が開通している事が分かった。七里の凸凹道を六里の直線道路へ、1時間23分の所要時間が40分に短縮されたのだ。この10号線を通れば余裕とまではいかないが間に合うことになる。おそらくこのようにして新発田駅に向かい、秋田行きの列車に乗ったと考えられる。

#### ④日本での講演を終えて

4月の時点から日本は異様な歓迎の嵐が続いていた。「ヘレンは決して聖女ではない、普通の人間なんだ。しかし彼女は努力し、苦難に打ち克った人なんだ」と冷静な目と理解をもって迎えるべきで、偶像崇拜のような称号で迎えるべきではないと言う内容の警告記事が4月23日に載せられたことは、人々が日本の福祉の為に来日している事を忘れて、好奇心の目でヘレンを見ていたことになる。その興奮が地方へ行っても冷めなかったとすれば、単なる物珍しさで話を聞いた者が新潟にも多く、彼女の主張の真意を理解することは出来なかったのかもたしな



い。

ヘレンは日本の講演を全てこなし、釜山へ発つ7月10日に、日本での国内旅行を総括して「あの破壊力、建設力こそ、日本の大和魂を、最も極端的に表したものだ。建設と破壊のすべてをプロセスさせた結合力に、日本の魂を発見した」と語った。しかし盲啞者に対する事項には辛辣を極めた。わが国で、これらの人に対する施設が少なく、不幸な人々に対する社会的地位向上に真剣に取り組んでいない政府は努力をするべきだと断言している。盲啞学校での義務教育や、経済的・社会的な人として福祉法の成立を急がなくては、東洋の先進国として満州やその他の地域の人々を救済することは出来ないと、政府の決断を促したのである。また盲導犬や盲人の営業権にも言及し、一定の職業しか持つことが出来ない、日本盲人を取り巻く社会環境の改革をあげ、経済的・精神的あらゆる生活上の条件を、一般社会人と同等の位置に引き上げるために社会福祉思想の発展を促したのである。

しかし日本は戦争への道を歩み出していた。よって全てが中断してしまい、障害児の義務教育は第二次世界大戦後となってしまった。

## § 4 来日から半世紀

### ①戦後の動き

1945年に第二次世界大戦が終わり、翌年から盲人福祉事業が再開された。連合国軍総司令部最高司令官（GHQ）は盲人の鍼灸就学禁止の意向を伝えたが、岩橋氏はその中止を働きかけ成功を遂げたのである。

1948年ヘレン・ケラーは二回目の訪問を実現。それを機に日本盲人会連合（日盲連）の発足や東京ヘレン・ケラー協会、青い鳥のうたが作られた。《参考資料テープA面に歌》

GHQは、障害者全体を対象とするリハビリテーション法の制定を計画し、日盲連もこれに参加して長年の望みであった身体障害者法が1949年に実現された。岩橋氏が1954年に永眠したことと第一回アジア盲人福祉会議での日本講演開催の為にヘレンは三回目の来日をした。

1968年（昭和43年）6月1日、“LITTLE東京”と言われるコネチカット州ウエストポートの自宅で87歳の人生の幕を閉じた。日本政府はヘレン・ケラーに勲一等瑞宝章を贈った。

### ②盲人と盲導犬

1994年7月3日の新聞に“盲目のジャズ歌手 モンブランに挑戦”と言う記事があった。

欧州の最高峰モンブラン（4,807m）に三年前から生活を共にする盲導犬のポルトニア号とその他、夫や友人らと3,000m地点から登頂を始め、順調にいけば6日には山頂に立つ事を試みたそうだ。彼女は「犬が私を頂上まで引っ張ってくれるでしょう」とインタビューに答えていた。

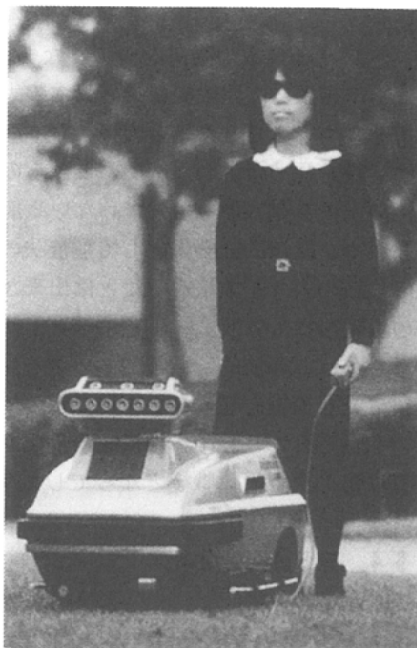
かつてヘレン・ケラーもナイアガラの滝（アメリカとカナダの国境）へ行った時、「アメリカ滝が落下していく断崖の上に立って、空気が振動し大地が動揺するほど激しい感激をした」と言う。多くの人に波を見ることや響きを聞くことが出来ないのなら何も意味はないのではと言う疑問に対して、「最も明瞭な意味において、それらは私にとってあらゆる意味を持っている。どれほどの意味を持つか深さの定義は出来ませんが、私が愛や宗教や善の意味の深さを定義できないと同じである」と言っている。目で見えることは出来ないが、体で何か感じようとし

ていたのである。

同じような感情を抱き、ジャズ歌手は6日山頂に達したのである。

日本の盲導犬の実動数は、約800匹で米国の7,000匹や英国の4,000匹と比べるとあまりにも差があり過ぎる事から厚生省は今年度から毎年増やし、2001年には現在の3倍以上の2,600匹とする計画を「障害者対策新長期計画」に基づいて3月に打ち出した。必要とする障害者の約四割に普及させることで、人に頼ることを少なくし、精神的な自立を願っている。

日本では未来に、「メルドック」と呼ばれるコンピュータロボットが盲導犬の代わりとなって動き出すらしい。《写真4 参照》



《写真4》

### ③新潟の視覚障害者の様子

ヘレン・ケラーが新潟で講演をしてから半世紀が過ぎた。日本は身体障害者法を彼女によってもたらされた。新潟はどのどの様な変化を遂げたのであろうか。現在の視覚障害者の状況を報告する。

#### 〈視覚障害者人数と対応〉

1993年4月1日現在の県内視覚障害者の人数は6,983人（県民生部調査）で市内の場合を障害程度別にするると《表3》となる。

盲人に対して福祉的援助を定めている法令はいくつかある。心身障害者対策基本法、身体障害者・児童老人の各福祉法、就学激励に関する法律等の教育関係法、身体障害者雇用促進法等の職業関係法、国民年金、その他の郵便法、放送法等が挙げられる。それらに基づいて新潟では手当てや年金の支給、税金の控除、NHK受信料・JR線・バス・航空・佐渡汽船の料金の割引、福祉タクシー利用助成がされている。また点字図書館では無料で点字図書やテープライブラリー（声の図書）の閲覧と貸し出しをしている。点字電話帳や、機関や団体に配布されいる『点字にいがた』と言う新聞もある。

失明や弱視となった理由は人それぞれであるが、年々比率を高めているようである。県内には県中途視覚障害者連絡会や県盲人福祉協会（会員数600人）等があり、少しでも深い悩みを同志で和らげようと組織作りが進められている。

#### 〈生活〉

県盲協に参加している全盲の40歳半ばの男性の話に私は少し考えさせられる所があったので、いくつか紹介する。

- 有り難い点
- ・ ボランティア経験者の増加。
  - ・ 盲人ワープロは至れり尽くせりである。
  - ・ 盲人を受け入れてくれる大学が増加している。
  - ・ 声を掛けてくれる。

《表3》

	1992年	1993年	1994年
1 級	380 ( 5)	375 ( 5)	363 ( 1)
2 級	267 ( 1)	275 ( 1)	275 ( 1)
3 級	150 ( 3)	153 ( 3)	160 ( 3)
4 級	162 ( 2)	166 ( 2)	172 ( 2)
5 級	176 ( 1)	190 ( 1)	202 ( 2)
6 級	145 (—)	150 (—)	155 ( 1)
合計	1280 (12)	1309 (12)	1327 (10)

※ ( ) 内の数字は、18歳未満のもの

級 別	1 級	2 級	3 級	4 級	5 級	6 級	7 級
視覚障害	両眼の視力(万国式視力表によって測ったものをいい、屈折異常のある者については、きょう正視力について測ったものをいう。以下同じ)の和が0.01以下のもの	両眼の視力の和が0.02以上0.04以下のもの	両眼の視力の和が0.05以上0.08以下のもの	1 両眼の視力の和が0.09以上0.12以下のもの 2 両眼の視野がそれぞれ5度以内のもの	1 両眼の視力の和が0.13以上0.2以下のもの 2 両眼の視野がそれぞれ10度以内のもの 3 両眼による視野の2分の1以上が欠けているもの	一眼の視力が0.02以下、他眼の視力が0.6以下のもので、両眼の視力の和が0.2を超えるもの	

- ・手を引いて目的地まで連れていってくれる。
- ・NTTがREADING-SERVICE をしてくれる。

不満な点

- ・戸の自動化で町に匂いがなくなった。(魚や肉の匂い)
- ・歩道に車やバイクが放置してあり、歩きにくい。
- ・言葉の貧弱化をテレビで感じる。
- ・町がカラー化する事は弱視者を歩きにくくしている。
- ・看板が低い位置にあると邪魔である。
- ・県や市に対して、道路整備をする時には事前に障害者と話合いの場をもってほしい。

日本人は欧米人と比べて「自分で生きていく」気持ちが弱いそうである。「生きていきたいと言う意欲、外に出たいと言う意欲」これが基本にないと世の中生きていけないものであり、自分は積極的に外に白い杖を持って歩いていると語ってくれた。停電になった時は、人を誘導してあげれるのでラッキーとを感じるそうである。

障害を持っていると色々な職業に就くことは日本では今なお難しい。欧米では盲人の職場は広く解放され、その能力に応じて数百種類の場で働いているというのではないか。日本は、はなはだしく遅れている。そのような中、最近新潟市内で全盲の青年が「障害者が利用しやすい建

物や交通機関を整備し、学校でも障害者と健全者が一緒に学べる統合教育を進める」の抱負を胸に来春の新潟市議会選に無所属で出馬を決めたというニュースがあった。（新潟新聞10月29日）盲人の職業の門戸が彼を先頭に開かれることを願い、新潟がノーマライゼーション化した町になるように進めなければならない。

ヘレン・ケラー女史が望んでいたもの、それは障害者の自立を訴え、それに対応できる社会を築き上げることであった。

日本、そして新潟は女史の来日から半世紀でこのように変化し、ヘレン・ケラーの思いを受け継いでいる。

「あなたのランプの灯を今少し高く掲げてください。

見えぬ人々の行く手を照らすために」

## 終りに

卒論を書くに当たって、私は多くの協力が得られたことに感謝しなければならない。まだまだ勉強不足でヘレン・ケラーの主張を完全にまとめるには至らなかったが、ヘレンが日本の各地で、そして新潟で訴えた事は、障害者の自立を図る事であったと言える。

一回目の来日は日米の和平工作であったという見方もされているが、半世紀以上たった事実を忘れてはならないし、三重苦という大きな障害に負けることなく立ち向かい、世界中の多くの障害者への激励と、彼等が安心して暮らせるような社会を築き上げようとしたヘレン・ケラーの願いを私達は後世にも受け継いでいかなければならない。

現在AFBは視覚障害者の地位向上を図るために情報収集を主に行っており、本部の三階の一室をヘレン・ケラーのメモリアル・ルームとして、彼女の所持品や証書、メダル、写真、ブロンズ像（1 m50cm）を展示している。

又、ヘレン・ケラーとその恩師アン・サリバンの遺骨はワシントン大聖堂の地下礼拝堂にある。そこには次のような文章が英語点字で刻まれている碑があると言う。

「ヘレン・ケラー及び彼女の生涯にわたる伴侶アン・サリバンが、この礼拝堂の奥に眠る」

## ヘレン・ケラーの年譜

- 1880            6/27 アメリカ合衆国アラバマ州タスカンビアに生まれる。  
父アーサー・H・ケラー大尉 母ケイト・アダムズ・ケラー。
- 1882    (2)    2月（19ヶ月目）、高熱が続き目と耳が不自由となる。  
病名一胃と脳髄の急性充血
- 1886    (6)    ワシントンのグラハム・ベル（電話の発明者）を訪ね、パーキンズ学院を紹介してもらう。
- 1887    (7)    3/3 アン・サリバン（20歳）が、家庭教師としてケラー家へやってくる。
- 1888    (8)    5/26 アンとボストンへ行きパーキンズ学院のアナグノス校長と会う。
- 1890    (10)    ボストンのホレスマン盲学校の校長サラ・フラーより、発音法を学ぶ。盲児を学校に入れる為に、募金活動始める。

- 1893 (13) ナイアガラ滝とシカゴ万国博覧会。
- 1894 (14) ニューヨークのライト・ヒューメイソン聾学校入学。
- 1896 (16) 9月 普通学校ケンブリッジ女学院入学。10月父死去。
- 1899 (19) 6月 ハーバード大学女子部 ラドクリフ大学の入学試験合格。
- 1900 (20) ラドクリフ大学入学。
- 1903 (23) 『おいたちの記』出版(自伝)
- 1904 (24) 大学を優秀な成績で卒業、文学士の称号を得る。
- 1905 (25) アンとジョン・メーシー結婚。『暗黒よりいので』出版。
- 1906 (26) マサチューセッツ州盲人救済委員になる。
- 1909 (29) 社会主義者になり、婦人参政権運動、産児制限運動、公民権運動など多くの政治的・人道的な抗議運動に参加。
- 1913 (33) 『暗黒の中から』出版。アメリカ陸横断の講演旅行をする。
- 1914 (34) 第一次世界大戦勃発(～1918)  
ポリー・トムソンが秘書となる。
- 1916 (36) ピーター・フェイガンと恋愛。婚約するが、結婚できず。
- 1918 (38) ヘレンの半生を描いた、「救済」が制作される。寄席の巡業にでる。
- 1922 (42) 母死去。
- 1924 (44) アメリカ盲人協会の仕事に従事する。募金活動に協力し、盲人の福祉向上の為に活動。
- 1927 (47) 『わたしの宗教』出版。
- 1929 (49) 『流れの半ばにて』出版。
- 1930 (50) アン、重病。第一回目の海外講演旅行(スコットランド、イングランド、アイルランド)
- 1931 (51) ヘレンとアンはテンプル大学より、名誉学位(人文博士号)を授与される。
- 1932 (52) イギリス グラスゴー大学より、法学博士の名誉称号贈られる。
- 1936 (56) 10/20 アン・サリバン死去(70歳)  
病名-冠状動脈血栓
- 1937 (57) 4/15 ポリーと共に一回目の日本来日(全国各地)。
- 1939 (59) 第二次世界大戦、勃発(～1945)
- 1943 (63) アメリカ軍の病院に、失明した病兵を見舞う。
- 1946 (66) 海外盲人アメリカ協会の代表として、ポリーとヨーロッパを訪問(ギリシャ、イタリア、フランス、イングランド)
- 1948 (68) オーストラリア、ニュージーランド、そして二回目の日本来日。
- 1950 (70) 東京ヘレン・ケラー協会作られる。
- 1951 (71) 南アフリカを訪問。
- 1952 (72) フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を授かる。  
エジプト、レバノン、シリア、ヨルダン、イスラエルを訪問。
- 1955 (75) 三度目の来日。
- 1960 (80) ポリー・トムソン死去。
- 1961 (81) 病気になる、徐々に外界との接触を失う。

- 1964 (84) アメリカ大統領より、「メダル・オブ・フリーダム」の勲章贈られる。  
1968 (87) 6/1 ヘレン・ケラー コネチカット州ウエストポートで死去。

参考文献 (写真含む)

<1章から3章>

- 岩橋英行『青い鳥のうた ～ヘレン・ケラーと日本～』日本放送出版局、1980年  
ヘレン・ケラー『わたしの生涯』(岩橋武夫訳)、角川文庫、1966年  
アン・サリバン『ヘレンケラーはどう教育されたか』(槇恭子訳)、明治図書出版株式会社、1973年  
フィオナ・マクドナルド『ヘレン・ケラー』(菊島伊久栄訳)、偕成社、1994年  
井上一夫『ヘレン＝ケラー』講談社、1987年  
『新潟新聞』1937年4月15日、6月10日～13日  
『東京日日新聞』1937年4月15日～19日  
『新潟市史下巻』新潟市役所、1988年  
テープ 日本点字図書館

<4章>

- 『新潟日報』1994年8月29日～31日、10月29日  
『ビューローだより』市社会福祉センター No.48,49,50  
『新潟市の社会福祉』1992,93,94年度 新潟市福祉部

(卒論指導 片桐邦郎教授)